

Time Perspective と Personality との関連 IX —— 自己存在様式を指標として ——

中島 千加子*・吉田 昭久**・高次 美佳***
(1990年9月14日受理)

On Time Perspective and Personality IX: Modes of Existence

Chikako NAKAJIMA, Teruhisa YOSHIDA, and Mika TAKATSUGU
(Received September 14, 1990)

はじめに

前論文¹⁾においては、質問紙調査に基づき、Time Perspective の心的構造に関して因子分析的に検討した。その結果、現代人の多くが Time Perspective の広がり無さの中に在ることが明らかとなった。そこからは、時間を節約することが美徳であるかのように装いつつ、実態は常に時間に追われ、何らかの速さを競い合いつつ生きざるを得ぬ現代人の「生きる」状況が浮き出て来る。そのような中で、人間は自己の持つ能力を最大限に発揮し得ているのであろうか。何の不安感もなく、違和感もなく生活しているのであろうか。Time Perspective の狭量化に伴う問題は数多くあろうが、本研究においては、自己存在様式 (The Mode of Existence) を指標とした検討を試みたい。本論文の概要は以下のとおりである。

- I 自己存在様式と Time Perspective
 - I-1 人間存在と Time Perspective
 - I-2 自己存在様式
- II 大学生を対象とした質問紙調査
 - II-1 調査視点の構造化
 - II-2 質問紙調査の実施
- III 因子分析的検討
 - III-1 自己存在様式に関する因子分析的検討
 - III-2 現代青年の自己存在様式の様相

* 茨城大学大学院教育学研究科。

** 茨城大学教育学部教育臨床心理学研究室。

*** 西武コミュニティ・カレッジ諫早。

I 自己存在様式と Time Perspective

I-1 人間存在と Time Perspective

人間存在について考えるとき、人と時間と空間三者の関係の位置付けは欠かすことが出来ない問題である。人間が生き、かかわっていく時間と空間、即ち世界の広がりを示す概念が Time Perspective であるが、以下に、人間存在とその根源的・本質的な時間および、世界との関係についての若干の見解に触れてみよう。

キルケゴール，S. は、情熱をもって自己とかかわり、本来の自己を現成させようとする人間存在の在り様を「実存 (existence)」とよび、自己自身であろうとすることにおいて自己同一ではありえないという矛盾するものとして、「実存」は時間と同義であると主張した²⁾。彼は、人間における本質的な時間を、時計やカレンダーなどにより計測可能な物理的時間とは異なったものとしてとらえている。

「実存」の問題に関してはサルトル，J. P. も言及し、キルケゴールと同様に自己を時間化してとらえている³⁾。彼によれば、「実存」とは事物存在や道具存在とは異なる人間存在の在り方であると言う。事物存在や道具存在との違いは、存在そのものが自己に関心を持ち、本来の自己になろうとするところにある。サルトルは自覚的な人間を特に「対自 (pour-soi)」とよび、「それがあるところのものでない」という仕方でも過去、「それがないところのものである」として未来を位置付け、更に「それがあるところのものでもはやなく、それがまだないところのものである」として現在を定位して、時間性を対自の存在論的構造そのものとしてとらえている⁴⁾。

また、ハイデッガー，M. は、実存としての人間、即ち現存在 (Da sein) の本来の姿は時間性 (Zeitlichkeit) であるとし、日常に頹落した現存在が、本来のものに戻ることにして人間存在の時間性をとらえている⁵⁾。更に、現存在は、どこから来てどこへ行くかも知られずに「そこ」に投げ出され、そこに投げ出されたことの意味を「了解」し、投げ出された現実世界の中で自分自身を創造しながらその可能性を展開していくものとして、このような「被投性 (Geworfenheit)」と「投企 (entwerfen)」という在り方が⁶⁾、現存在の「世界-内-存在 (In-der-Welt-sein)」⁷⁾としての在り方であると主張した。「世界-内-存在」とは「世界の中に人間がいる」という空間的位置関係ではなく、現存在が「世界 (world)」と「かかわり」を持って生きる、あるいは生きていることを意味する。このことに関して、メイ，R. は、ハイデッガーの言う現存在がかかわって生きる世界を「まわりの世界 (Umwelt)」「共にある世界 (Mitwelt)」「独自の世界 (Eigenwelt)」という三つの様態 (modes) に分化させてとらえている。そこでの「まわりの世界」とは私達のまわりの対象 (object) の世界と自然の世界 (natural world) のことである。「環境 (environment)」と一般に言われるものと同義と考えてよいが、それは、人間が誕生によってその中にほうり込まれ、しかも、何らかの形でそれに適応しなければならない世界である。「共にある世界」は、人間同士の相互関係的な世界である。友人、近隣、その他の仲間集団、他の人々とのあらゆる関係 (relationship) がここでは問題となる。また、「独自の世界」とは、自己への気づき (self-awareness) と自己へのかかわり (self-relationship) を前提としているものであり、人間にとっての独自性として存在しているものである。これは、我々が現実の世界 (real world) をその本当の枠組で見る

基盤であり、また我々がかかわりを持つ際の基盤となるものである。「実存者」が本来的な自己を求めていくということには、この「独自の世界」におけるかかわりを言う。

以上に述べた三つの世界において、環境に気を配りながら（Bestorgen）、他の人々に対して気を使い（Fursorgen）、しかも自己自身について気にしながら（Sorgen）人間は生きており、それが、かかわりながら生きるという現存在の構造であるとハイデッガーは主張し、人間存在を時間性のみならず、空間までも含めた「世界」との関連でとらえている。

このように、人間存在を考えるとときに、時間と空間、即ち世界の問題は欠かすことが出来ない。前論文でも触れたが、精神病理学者ミンコフスキー、E. は、「生きられる時間」を「この流動する魂、この動く、神秘的で、壮麗で、力強い大海原である」⁹⁾と定義した。彼の空間化した時間は、ハイデッガーの言う「世界」に通ずるものであると言えよう。彼は、人間存在にとっての時間と空間の問題を心理学、哲学だけではなく現代文化全体の中心的課題であると指摘する。

人間存在を三つの様態の世界とかかわりつつ、その中で自己を現成していくというとりえ方に立つ時、Time Perspective とは、人がかかわっていく世界の広がり、即ち、空間化された時間、言い換えれば時間と空間の広がりであると言える。そしてその世界との関係性は、フロム、E. の主張する「生きた関係」と「死んだ関係」とに分化でき、しかも、そのかかわり方、関係の持ち方の質は、「あること（to be）」と「持つこと（to have）」という二つの方向性の異なる存在様式に表出するものとしてとらえられる¹⁰⁾。

I-2 自己存在様式¹¹⁾

「独自の世界」で自己とかかわり、「共にある世界」で他の人々とかかわり、そして「まわりの世界」で我々のまわりの対象や自然とかかわりあいながら人間は生きている。フロムによれば、「あること」と「持つこと」とは、「自己と世界に対する異なった方向づけ」であり、「そのそれぞれの強さによって人の思考、感情、行為の総体が決定される」人間にとっての二つの基本的な存在様式（Two Modes of Existence）である¹²⁾。「持つ」ということは、物を持つことにより、自己の価値、同一性、存在の証をすることである。即ち、自分の持っている人間としての価値、存在の確信を「何か」を持つことで得ており、〈私はXを持っているがゆえに私である〉という在り方を示すことになり、「持つ」という関係は、「物ばかりでなく、人間、知識、観念、神、さらには健康や病気にまで及んでいる。それは主体と客体双方を物にすることであって、そこにあるのは死んだ関係である」とフロムは主張する¹³⁾。そこでは、物を持つことがそのまま人間の確実感、安定感になり、多く持てば持つほど安心感を持つことが出来ることになる。それ故より多く持つことを欲し、また他人よりも多く持っていることが、他人より優れていることにつながる。このように「持つ様式（the having mode）」は競争原理に基づき、他者との比較によってでしか自己の存在を確認出来ない他者依存的状況をもたらすことになる。フロムが「幸福は他人に呈する自己の優越性の中に、自己の力の中に、そして究極的には征服し、奪い、殺すための自己の能力の中にある」と言うように、「持つ様式」にあっては、他者は疑惑の対象ではあっても、信頼の対象とはなり得ない。物を持つことで安定感は得られたとしても、常に相手より良いもの、より多くのものを得ようと敏感でいなければならず、いつも持つことを渴望しており、豊かに物はあっても心の満たされることはない。そこには不安定感が蔓延しており、フロムはこれを「慢性の飢餓状態」とよんだ¹⁴⁾。

この「持つ様式」の増大は、人間の「疎外（alienation）」の問題へとつながることになる。

一方、「ある」ということに関しては、「何ものにも執着せず、何ものにも束縛されず、変化を恐れず、絶えず成長すること」¹⁶⁾であり、また「人が何も持つことなく、何かを持つと望むすることなく、喜びがあふれ、自分の能力を生産的に使用し、世界と一つになる」存在様式であるとフロムは言う¹⁷⁾。「持つ様式」においては、物を持つことが自己の存在の証となるために、持つことを渴望したが、「ある様式（the being mode）」にあってはこの渴望はない。フロムは「ある様式」の基本的特徴を「内面的能動性」¹⁸⁾であると主張する。彼によると「内面的能動性」とは、びっしりと埋め尽くされたスケジュールを忙しくこなしていくだけの外面的・受動的なものとは異なり、外界の何かに強制されてするのではなく、自己の人間的な力量を生産的・能動的に最大限に使用することであり、自己の衝動として沸き溢れるエネルギーの表出として「してしまう」ことを意味する。更に、「世界（自己・他者・ものを含む）と一つになる」とは、「愛」¹⁹⁾という活動性で世界とかかわっていることである。フロムは「愛においては二人の人は一つになり、しかもふたつにとどまるという矛盾したことが起こるのである」と言い、これは「人」のみではなく、「もの」「自然」とのかかわりにおいても同様にとらえることが出来、「成熟した愛は、本来の全体性と個性を持ったままの状態での合一である」と言うが²⁰⁾、これは「持つ様式」における搾取・依存等という形態の、人間・もの・自然の物象化を示す「死んだ関係」に対する、「ある様式」における「生きた関係」を示していると言えよう。フロムは、世界とそのような関係を結ぶ「ある様式」の人の心的世界について、「私のある能力と、自らの本質的な力を表現する力とは私の性格構造の一部であって、それを左右するのは私である」²¹⁾ 故に、「持つ様式」とは異なり、物を持つことで自分を安心させる訳ではないので、誰かに負けてしまうのではないかと、持っているものを失うのではないかと思い煩うことはないと主張する。

更に、存在様式と時間性との関連について、フロムは次のように言う。「ある様式は、今ここに（hic et nunc）のみ、存在する。持つ様式はただ時の中のみ、すなわち、現在、過去、未来の中に存在する」²²⁾。「持つ様式」は、過去に蓄積した物、例えば金、土地、名声、社会的地位、知識、子供、記憶などに縛られた存在様式である。「持つ様式」にある人は、何かを手に入れるための準備期間として現在を生きるが故に、単位時間にどのくらいの物を作ることが出来るか、どれほどの仕事が出来るとかという視点を重視し、時間を節約したり、せかせかとした生活をするようになる。それは、一見積極的な態度のように見えるが、何もすることがない時間を恐れている姿と受け取ることも出来る。フロムはこのことについて「彼らはいわゆるレジャーさえ、また別の活動に変えてしまう。あなたが金もうけのため活動していない時は、あなたはドライブをしたり、ゴルフをしたり、くだらぬおしゃべりをしたりして活動している」²³⁾と述べている。また一方、未来はやがて過去となるものであるとしか見られず、「私が行なうこと、あるいは私になるものでなく、未来や後世という偶像が何かをもたらすのであって、私は何もしない」と言うように、そこでは「時を期待する」形で「希望」は疎外されることになる²⁴⁾。これは受動的な希望を持つことであると言えよう。「持つ様式」における人のそのような状態をフロムは「時間に対する屈服」²⁵⁾とよんだ。

工場の生産性が追及され、技術が進歩した現在、労働時間は短縮化し、余暇時間は拡大する傾向にあるが、このことに関してフロムは次のように指摘する。「今日、われわれは、祖先たちが、夢にも見なかったほどの自由な時間を持っている。だがそれでどうなったのか。われわれは、新たに

獲得した自由な時間の方法を知っていない。せっかく節約した時間をむだにつぶそうとし、一日が終われば、ほっとする²⁶⁾。「近代の人間は彼がものごとを早くし終えないときには、なにか一時間—を失っていると考え。しかし、彼はこうしてかせいだ時間でなにをしたらよいかを—それをつぶす以外には—知らないのである²⁷⁾。フロムはこのように、物理的時間を「なんとなく」つぶしたり、あるいは強迫的に活動するという、高度産業社会に生きる人間像を描いているが、これは、「持つ様式」にある人の心理的時間の広がり、即ち、Time Perspective の狭さを示しており、また、現代人の「利那主義」²⁸⁾ 的傾向をも示唆していると言える。同様の現象に関して、メイ、R. は「人間の持っている時間認識の能力を神経症的、非建設的に利用する方法の一つは、本当に現在を生き抜くことをしないで、生をあとまわしにすることである」と指摘し、「現在の瞬間こそわれわれのもっているすべてである²⁹⁾」としている。

一方、「ある様式」においては、未来にも過去にも縛られることはない。それは、物理的時間を超越していることであり、今一瞬を能動的に生きることが出来ることである。「現在に生きること、このところに、このいまの時に完全に生きること、そしていま、自分がなにかをしている間は、つぎにするであろうようなことについては考えないということ³⁰⁾とフロムは言う。そこには、「内面的能動性」、「愛」の実践、更には他者への信頼が関与し、そのような在り方を示す人間のTime Perspective は必然的に広いととらえることが出来る。

これら「あること」と「持つこと」とは、人間性における二つの可能性であるが、現代の高度産業社会に生きる人間においては、「持つ様式」の方をより頻繁に経験し、それが増大化せざるを得ないことをフロムは指摘し、以下のように述べている。「物は豊富にあるが、暮らしはよくなったとは言えない。より裕福になったが、自由はより少なくなった。より多くを消費するが、より空虚になった。より多くの原子兵器はあるが、よりいっそう無防備になった。教育は増大したが、批判的判断や信念は減少した。宗教はふえたが、私達は物質主義的になった³¹⁾。

彼は、人間が「〈消費者〉に変貌させられ、満足を知らぬ乳飲み子となり、より多くのより〈よい〉ものを消費することだけを望む³²⁾」ようになったとし、「自己が作り出した物や組織に屈した³³⁾」状況³³⁾に人間がおかれていることを示唆している。そして、その「持つ様式」の増大の結果、人間は無意味と無力の感情にさいなまれ、「何か物足りない」という「生に飢えた状態」になったと主張する³⁴⁾。更にフロムは、現代に生きる人間の苦しみは、貧困よりも「大きな機械の歯車、自動人形になってしまったという事実、彼の生活が空虚になり、その意味を失ってしまったという事実³⁵⁾」であることを主張し、「疎外」即ち「精神的な死³⁶⁾」の問題を提起する。彼は言う。「ただ一つの目的を失っている。その目的とは——自分自身 (man himself) である³⁷⁾」と。フロムは、食欲や性欲が満たされるだけでは満たされ得ない人間の精神的な「生」の欲求、即ち「真の自己であろうとする根深い欲求」に注目し、それは「ありたいという生来の深く根ざした欲求」であり、「自分の能力を表現し、能動性を持ち、他人と結びつき、利己心の独房から逃れたいという欲求」であって、その欲求に従う生き方、「真の自己」になっていく在り方、即ち「ある様式」の重要性を主張する³⁸⁾。そして、更に加えて、「万一、われわれが、他人の不幸に、他人の親しい眼差に、小鳥の歌に、緑の草木に感動する力を喪失してしまったならば、いかなる自覚をもってしても、われわれは救済されえないだろう³⁹⁾」と述べている。他人の不幸や、眼差、小鳥の歌、緑の草木に、真に感動出来、共感出来るためには、その人間の生きる世界が、自己のみでなく他者、そして自然や

ものにまで広がるのが前提となる。この視座に寄れば、人間が「真の自己」に近付くためには、Time Perspective の拡大を自ら図ることが必要となろう。

II 大学生を対象とした質問紙調査

II-1 調査視点の構造化

自己存在様式とは、文字どおり「自己」の「存在」の様式である。本研究においては、「感情の状態」「かかわりの対象」「対象への取り組みの態度」という三次元を問題として、自己存在様式をとらえた。以下に設定した各次元の視座について言及してみよう。

フロムは「あること」と「持つこと」の側面として、security と insecurity という二つの「感情の状態」をあげている⁴⁰⁾。彼は「用心深い、持つ人物は安心感を味わっているが、彼らは必然的に極めて不安定である」と言い、「持つ」人物の安定感是非常に脆い安定感であり、「自分が持っているもの、即ち、金、威信、自我一つまり、自分の外にある何ものかーにたよっている」が、「持っているものを失うことがありうるので、必然的に持っているものを失うだろうと、絶えず思わすらう」ことになる⁴¹⁾。その思い煩いが、「持つこと」における insecurity 「不安定感」という感情の状態であると言える。

一方、「あること」に関してフロムは「持っているものを失う危険から生じる心配と不安は、ある様式には存在しない。もし私が、あるところの人物であって持つところのものでないならば、誰も私の安心感と同一性の感覚を奪ったり脅かしたりはできない」のであり、「持つこと」においては持っているものに自己の中心的課題を据えているため、持っているものが失われるのは「私」がなくなることと同義であり、いつ失うかと脅えざるを得ないが、「あること」においては、「私の中心は私の中にある」のであって、何かを失ったとしても、そのために挫折することはないと述べている⁴²⁾。それは、自己の外側の現象変化によっても揺らぐものでもない。このような「あること」における感情の状態が、security 「安定感」である。

人間が存在する上での「かかわりの対象」は、大きく分けて「自己 (self)」「他者 (others)」の二つに分化することが出来る。「世界—内—存在」としての人間のかかわる「世界」は、前述したように、「まわりの世界」「共にある世界」「独自の世界」という三つの様態を持つ。そこでの、それぞれの世界における「かかわりの対象」は、物と自然、自分以外の人間、そして自分自身である。自分自身以外の三様態は、広く言えば、すべて others 「他者」としてとらえることが出来る。しかもその「他者」には、社会 (society) や価値的、恣意的な意味を持つもの、例えば観念、宗教なども含めることが出来る。

「対象への取り組みの態度」には、「積極的 (active)」「消極的 (passive)」の二水準が考えられる。active という語は「能動的」、passive は「受動的」という意味を同時に含み持つ。フロムが、「ある様式」の基本的な特徴として「能動的であること」をあげ、それは「自分の人間的な力を生産的に使用するという、内面的能動性」であって、その「能動的」とは、「自分の才能や能力を、そして総ての人間に与えられている豊富な人間的な天賦を表現すること」である⁴³⁾とするとき、人間は、実際に、何かを生産することがなくとも、精神的側面において、生産的でありうる。

一方、passive な「対象への取り組みの態度」は、フロムの言う能動的でないこと、即ち受動的であることであるが、更には、「疎外」された取り組みも含まれよう。「疎外された能動性」に関して、フロムは「私は本当に働きかけはしない。私は外的、あるいは内的な力によって働きかけるのである。私は能動性の結果から、切り離されて」しまう状態であると位置付けている⁴⁴⁾。そこでは、働きかけている自分からも、またその結果、物理的、精神的に生産したものからさえも疎外されてしまうことになる。即ち、自己が「能動性」を持った行動主体としての経験をしている場合、そのときの「取り組みの態度」は active 「積極的」であり、行動の主体として自己を経験していない場合の「取り組みの態度」は passive 「消極的」であると言える。

このように各次元を設定し、各次元の交絡する部分に関する現象の記述の際の具体的質問項目視点として、自我防衛機制 (Defense Mechanism) を位置付けた。

人間は、自分の意志にかかわらず誕生し、死んでいく存在であり、また、その自分の死を知っている⁴⁵⁾。その自覚により、他とは分離した、孤独な一個の自己存在であることを確認する。人間が生きていく過程で、確認する孤独感、不安感を克服することは、人間にとって常に重要な課題となる。そこで、人間は、具体的な生きる場における孤独感、不安感に対して、何らかの自我防衛機制を働かせることにより、個々の課題を解決しつつ生きる存在様式を示していると言える。その存在様式には、「感情の状態」「かかわりの対象」「対象への取り組みの態度」という三つの視座を交絡させて考えると、次の八つの自我防衛的な側面が挙げられよう。かかわりの対象が「自己」である場合には、まず、かかわりの態度が「消極的」で感情の状態が「不安定感」である存在様式として、自我が脅かされるような心理的場や関係におかれる時に、そこから「逃げる」という「逃避 (escape)」を位置付け得る。次に、かかわりの態度が「積極的」で感情の状態は「不安定感」の存在様式には、抑圧された欲望が意識化されそうになって起こる内的な危機感を、実際の不安や罪悪感として意識するときに、その現実を認識せずあるいは受け付けず、自我を正当化する心的機制として働く「拒絶 (rejection)」を視点として置くことが出来る。また、かかわりの態度は「消極的」で感情の状態が「安定感」である存在様式においては、例えば自分の心身の欠陥や、劣等感情克服のために、自己の保有する何らかの特徴を伸ばし他人に優るといった、自我を脅かすものを別な何かで達成する「補償 (compensation)」を位置付けることが出来る。更に、かかわりの態度が「積極的」で感情の状態が「安定感」である存在様式では、自己の内的な欲動や感情を直接体験したり表現するかわりに一応これを抑圧し、論理的な思考過程、知識の獲得・伝達、客観的認識や観察の過程などを通して、これらの欲動や感情を表現し、充足するという「知性化 (intellectualization)」が視点となる。

「他者」に対するかかわりの場合として、まず「消極的」な態度で取り組み、感情の状態が「不安定感」である存在様式には、自我を脅かすものとかかわらないことで、自己にとっての心理的な事実間の意味のある結び付きを切り離し、隔離する自我防衛機制としての「孤立 (isolation)」を位置付けることが出来る。次に、「積極的」な態度で取り組み、感情の状態が「不安定感」の存在様式には、取り入れ対象となる「他人」のある一面、あるいは幾つかの特性、場合によってはその対象の持つ全体性を自己にあてはめ、それと近似な存在となることで、内的不安を解決しようとする「同一視 (identification)」の機制を位置付け得る。また、「消極的」な態度で取り組み、感情の状態は「安定感」を示す存在様式で、個人を囲む生活環境の中で、自己の判断や行為を集団

表1 自己存在様式に関する構造化と具体的質問項目

a	b	c	消極的 (passive)	積極的 (active)
自己 s e l f	不安 a n s e c u r i t y	逃避 (escape) 1. 失敗するのが怖いので、一度失敗したら二度と挑戦しない。 2. 間違えをおかすのが不安なので、自分からは何も取りかかろうとしない。 3. 何が起るのかわからないのは不安なので、自分の予定していないことはしない。 4. 自尊心が傷つくのは辛いので、できないと思ったり途中で終わりにする。 5. 我慢をしていると落ち着かなくなるので、自分の嫌いなことはやろうとしない。	<p>拒絶 (rejection)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の失敗に悩むのはいやなので、自分の失敗を失敗としては認めない。 2. 罪悪感にさいなまれないやなので、自分の過ちを罪としては認めない。 3. 自分と違う意見を受け入れられると不安なので、他人の意見には耳も貸さない。 4. 自分の知らない話題にはついていきたくないなので、みんなと話をしているときでも聞いていない。 5. 自分の思い通りにならないのは腹が立つので、どんな意見でもけちをつけて受け入れない。 	<p>知性化 (intellectualization)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の考えをより論理的にするために、自分にとってためになる本を読む。 2. 視野を広げることで自分を豊かにするために、不得意な分野であっても知識を得るように取り組む。 3. 自分の行動をより責任ある知的なものにするために、世の中の道徳や社会規範を身につける。 4. より常識的な判断力を身につけるために、今の時代の情報源となる新聞や雑誌を読む。 5. 自分の専門的な事柄の理解をより深めたいので、自分にとっては難しい専門書でも調べながら読む。
他者 o t h e r s	不安 a n s e c u r i t y	孤立 (isolation) 1. 自分の考えは人とあわないので、人前では自分の考えは言わない。 2. 他人は全く信用できないので、他人に自分の頼み事などはしない。 3. 人の心の奥底まで理解するのは不可能だから、最初から友達つきあいをしない。 4. 他人は所詮何の手助けにもならないので、他人に自分の相談事をしない。 5. 他人との関係は自分にとって役に立つものではないから、他人の意見や考えを非難したり批判しない。	<p>補償 (compensation)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の容姿をより良く見せるために、体型の欠点が目立たないような服を着る。 2. 自分の欠点を自分の心掛けで補うために、欠点を出さないよう注意をはらって行動する。 3. 自分の常識が足りないところを補うために、知らない話では知っている顔をして聞き役にまわる。 4. 大人びた振る舞いをして目上の人と対等に付き合うことで、自分の未熟さを補うよう行動する。 5. 自分のいい加減なところを補うために、自分にとってためにならないと思う仕事でも救げ出さない。 	<p>同一視 (identification)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 仲の良い友達と同じようでないで不安なので、自分に似合わないと思っても友達が着ている流行の服を着る。 2. 好きな人と同じ趣味でないで不安なので、我慢しても相手に合わせようとする。 3. 仲間内で自分だけ違う態度を取るのには落ち着かないので、物事を決めるような時にはまわりの人に合わせる。 4. 親の考え方と自分の考え方が違うと落ち着かないので、親の考え方に合わせた行動をする。 5. 物事の取り組み方が仲の良い友達と違うと不安なので、友達と同じような仕方をする。
他者 o t h e r s	不安 a n s e c u r i t y	同調 (sympathy) 1. 他人に良い印象を与えるように、いつも相手に合わせて行動する。 2. お互いの理解を深めて楽しくつきあえるように、自分と違う考え方でも尊重して聞こうとする。 3. 他人を思いやる気持ちは大切だと思うから、他人のことをいつも考慮に入れて行動する。 4. 他人に対して心優しい人のように振る舞いたいから、相手の感情や思いを汲んでつきあう。 5. 自分の我がままから人に迷惑をかけたくないの、相手に合わせて控えるために振る舞う。	<p>連帯 (solidarity)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心が豊かになるような人のつきあいが大切なので、たまたま行きあわせた人の話でも本気で聞く。 2. 人が励まし合うことは心温まることなので、何かで困っている人には気持ち良く手を貸す。 3. いろいろな人とめぐりめぐりあいは楽しいので、学歴や職業にかかわらずどんな人ともつきあう。 4. 人が助け合うことは生きていく上で大切なので、人の信頼には誠心誠意応える。 5. どんな人でも何かつながりをもって生活しているのだから、人と助け合い自分の役割を果たそうとする。 	<p>連帯 (solidarity)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心が豊かになるような人のつきあいが大切なので、たまたま行きあわせた人の話でも本気で聞く。 2. 人が励まし合うことは心温まることなので、何かで困っている人には気持ち良く手を貸す。 3. いろいろな人とめぐりめぐりあいは楽しいので、学歴や職業にかかわらずどんな人ともつきあう。 4. 人が助け合うことは生きていく上で大切なので、人の信頼には誠心誠意応える。 5. どんな人でも何かつながりをもって生活しているのだから、人と助け合い自分の役割を果たそうとする。

注) a : かかわりの対象 b : 感情の状態 c : 対象への取り組みの態度

を含めて他者や社会規範と一致させる「同調 (sympathy)」を視点として置くことが出来る。「積極的」な態度で取り組み、感情の状態が「安定感」を示す存在様式に関しては、概念の本質的意味から言って自我防衛機制の説明概念で位置付けることは出来ない。ここでは個人にとって「他者」は自我を脅かすものとはならず、与え、分かち合い、共感し合う関係性を結ぶ対象となる。この存在様式については、直接、間接を含めて、他者とのかかわりとつながりを自分から持とうとする「連帯 (solidarity)」の視点を置き、現象記述することとした。

以上の八つの視点に合うように、具体的質問項目を各部分に5項目ずつ(表1参照)、計40項目を選定し、調査に用いた質問票を作成した。尚、質問項目は総て個人が日常生活の具体的な場面に於いて示す行為の水準において記述した。

II-2 質問紙調査の実施

本研究の調査で使用した質問票は、Appendix I-i~iiに示した。内容は調査のお願い、Face Sheet、回答の際の注意点、設問から構成されている。各質問項目の回答の形式は、両極に「あてはまる」と「あてはまらない」とをおいた7段階評定とし、回答方法は、現在の自分に「ぴったりあてはまる」所一箇所を選択させ○印を付ける方法を取った(Appendix I-i~ii参照)。

調査は、1987年12月上旬に行い、調査方法は、大学教官に依頼して講義を割愛して戴き調査・回収する方法と、調査員が被調査者個人に直接質問票を配布し、回答記入後個々に回収する方法とを取った。被調査者の大学名、人数、有効データ数は表2に示すとおりである。

調査対象は、四年制大学の学生に限った。理由は、本調査が、日常生活事態に対する意識調査であるため、質問に回答するには、自己についての概念や行為を意識化、対象化できることが前提となるからである。発達心理学的知見によると、それは、自己意識の確立される青年期以降と見なされる。また、質問項目の内容を理解出来るだけの知的水準を、大学生であれば保有していることが前提となり、現代人を代表し得る。尚、調査結果の得点化は、「あてはまる」から「あてはまらない」の方向で、7、6、5、4、3、2、1点と配点した。

表2 被調査者の大学分布及び有効データ数

大学名	被調査者数 (人)	有効データ数		
		男	女	計
茨城大学	271	116	144	260
茨城キリスト教大学	20	3	14	17
山口大学	20	20	0	20
日本体育大学	20	0	19	19
和光大学	23	11	10	21
津田塾大学	20	0	20	20
大東文化大学	15	11	0	11
慶應義塾大学	22	20	1	21
計	411	181	208	389

III 因子分析的検討

III-1 自己存在様式に関する因子分析的検討

今回の調査に際して、仮設的に立てられた自己存在様式の構造化と具体的質問項目の現象記述が妥当なものであったかを検討するために因子分析を行った。因子分析にあたっては、相関係数はピアソンのものを用い、主因子法により回転前の因子行列を求め、バリマックス回転により、Appen-

dix II に示す最終的な因子行列を求めた。

因子解釈に当たっては、便宜上、因子負荷量 | 0.3000 | 以上の項目を取り出して行い、抽出項目数が二項目以上の因子に関して因子命名を行った。表 3 に、それぞれの因子に含まれる、因子負荷量 | 0.3000 | 以上の項目番号を示す。

表 3 自己存在様式に関する因子名及び各因子に含まれる項目番号

因子	因子名	項目番号
第1因子	「劣等感情を伴う同一視」の因子	22, 34, 28, 15, 17, 31, 21, 33, 35, 23, 14, 13
第2因子	「他者信頼を伴う連帯」の因子	16, 8, 25, 7, 39, 37, 10, 4
第3因子	「上昇志向を伴う知性化」の因子	38, 32, 12, 6, 27
第4因子	「自己不確実感を伴う抑圧」の因子	1, 3, 36, 20, 40
第5因子	「自己中心性に基づく拒絶」の因子	9, 29, 10, 33
第6因子	「幼児性に基づく退行」の因子	24, 27, 5
第7因子	「自己確実感を伴う知性化」の因子	20, 13, 4, 35
第8因子	「他者疑惑を伴う孤立」の因子	30, 18, 2, 26
第9因子		19
第10因子		

注) 項目番号は、因子負荷量の高い順に示した。

各因子に含まれる質問項目および因子負荷量を整理し表 4 に示した。この表から、構造化の際の視点及び項目の内容を検討し、各因子を以下のように解釈した。

第1因子は、「感情の状態」が「不安定感」の視点に属する項目中心に構成されている。「他人に良い印象を与えるように」「相手に合わせて」「友達と同じような仕方をする」というように、他人と違うこと、集団から外れてしまうことを恐れ、自分の行動を起こす際に他人を考慮している。失敗や間違いということも他人と違ってしまうことへの恐れと関連してしまう。他人と同じような行動を取れば、一人で失敗や間違いに悩むことはなくなる。各項目の意味関連から、他人を必ず考慮に入れ、他人と同じ行動をするという行為には劣等感情が反映していると見ることが出来る。そこで、第1因子を「劣等感情を伴う同一視」の因子と解釈した。第2因子は、視点が「他者—不安定感—積極的」の項目中心に構成されている。「どんな人とでも何かつながりを持って生活している」「人が励まし合うことは心温まる」「助け合うことは生きて行くうえで大切」というように、他者との相互成長を志向した関係性を求めていることがうかがえる。また、「自分のいい加減なところを補う」「自分にとってためにならないと思う仕事でも投げ出さない」ということは、他者との関係の中で自分の役割を果そうとする態度であると言える。他者を尊重し信頼しており、自分から他者のために行動しようとする内容を持つ項目からなる因子である。よって、第2因子を「他者信頼を伴う連帯」の因子と解釈した。第3因子は、自我防衛機制の「知性化」に属する項目で一貫している。「より論理的にする」「視野を広げることで自分をより豊かにする」「より常識的な判断力を身につける」「自分の専門的な事柄の理解をより深めたい」ために本を読み、不得意な分野に取り組むなど、自分を発展させたいとして、主に知的な手段に依拠して自我の拡大を図る内容の項目からなる。従ってこれを「上昇志向を伴う知性化」の因子と解釈した。第4因子に関してみると、感情の状態が「不安定感」の項目を中心に構成されているがやや一貫性を欠くため、解釈するにあ

たっては、項目内容の関連性を見る目的で因子負荷量 $|0.2500|$ 以上の項目（項目番号4, 8, 14）を参考とした。この因子が抽象するのは、項目内容から自分の罪悪感、罪、未熟さ等を認めようとせず押え込んでしまい、更には自分の持つ意見や考えまでも押え込んでしまう存在様式である。たとえ自分が失敗したり、未熟だということを思い知らされたとしても、自己に対する確実感を持っているとすれば、その失敗や未熟さや罪までも受け入れることが出来るはずである。また、仲の良い友達と同じようであれば不安になるということもないであろうし、他人との関係の中で、お互いに成長し合うために意見を言うことも出来るであろう。そこには、自己に対する不確実感の様相を見ることが出来る。以上から、第4因子を「自己不確実感を伴う抑圧」の因子と解釈した。第5因子は項目内容から自分の意見や考えを絶対に通そうとし、他人の意見や考えは聞く必要がないという内容を抽象する因子である。他者との理解を深めて楽しく付き合うことや、相手のことを考慮に入れることをしない存在様式を示している。そこで、第5因子は、「自己中心性に基づく拒絶」の因子であると解釈した。

第6因子に関してみると、第24, 27項目が負の因子負荷量を示している。つまり、この二項目は、それぞれ「自分の欠点を自分の心がけで補うようなことは必要ないので、欠点を出さないよう注意をはらって行動することはしない」、「自分の行動をより責任ある知的なものにしたいとは思わないので、世の中の道徳や社会規範を身につけようとは思わない」といった態度を反映していることになる。これは、「社会的に責任を担うこと」を拒否していると言える。更に、参考のために因子負荷量が -0.282 である第25項目を検討すると、ここからは、「人が励まし合うことが心温まることだとは思わないので、何かで困っている人がいても気持ち良く手を貸すようなことはしない」という態度の反映を見ることが出来る。従って、第5項目の内容は、「連帯」の意味では受け取られておらず、「楽しいので」付き合うに過ぎないという受け取りがなされたと考えることが出来る。「自分の欠点を自分の心がけで補う」ことや「欠点を出さないよう注意をはらって行動する」こと、「自分の行動をより責任ある知的なものにする」といったことは、「一人前」に現実を生きていく際には求められることである。このような社会的要請を自我機能の水準で受け入れられないということは、幼児性を表出していると解釈することが出来る。「いろいろな人とのめぐりあいは楽しい」という受け取りも、ここでは幼児性の表出であると言えよう。即ち、自分の年齢や立場に求められることを避けた気ままさや身勝手さが認められる。以上の点を踏まえ、第6因子は「幼児性に基づく退行」の因子と解釈した。第7因子では、自我防衛機制としての「同一視」の項目（項目番号20, 13, 35）が、負の因子負荷量を示すのが特徴的である。ここでも、因子負荷量 $|0.2500|$ 以上の項目（項目番号8, 10, 11）を参考に検討してみると、第8, 11項目は、負の因子負荷量を示すことから、「自分のいい加減なところを補わなくてもいいから、自分にとってのためにならない仕事は投げ出してしまおう」「自分の知らない話でもついていきたいから、みんなと話をしているときはちゃんと聞いている」という態度として受け取られていることが分かる。このように、自分と違う考えを尊重して聞いたり、自分の知らない話題にも耳を傾けることが出来るということは、自己が確立していなければ出来得ない。そうでない場合には、無理矢理に自己を主張したり、他人の存在を全く考慮しないという態度を取ることになる。第4項目における「我慢をしていると落ち着かなくなる」「自分の嫌いなことはやろうとしない」という内容は、それだけ強い自己確実感の表出として位置付けることが出来、第8項目に関しても同様に自己確実感を反映していると言えよう。

表4 各因子に含まれる具体的質問項目

因子	項目No	具体的質問項目	因子負荷量	視点
第1因子	22	他人に良い印象を与えるように、いつも相手に合わせて行動する。	.737	消-他-安 同調
	34	自尊心が傷つくのは辛いので、できないと思ったら途中で終わりにする。	.641	消-自-不 逃避
	28	物事の取り組み方が仲の良い友達と違うと不安なので、友達と同じような仕方をする。	.625	積-他-不 同一視
	15	仲間内で自分だけ違う態度を取るのには落ち着かないので、物事を決めるような時にはまわりの人に合わせる。	.606	積-他-不 同一視
	17	失敗するのが怖いので、一度失敗したら二度と挑戦しない。	.578	消-自-不 逃避
	31	間違いをおかすのが不安なので、自分からは何も取りかかろうとしない。	.539	消-自-不 逃避
	21	自分の常識が足りないところを補うために、知らない話では知っている顔をして聞き役にまわる。	.501	消-自-安 補償
	33	自分の我がままから人に迷惑をかけたくないので、相手に合わせて控えめに振る舞う。	.403	消-他-安 同調
	35	好きな人と同じ趣味でない不安なので、我慢しても相手に合わせようとする。	.389	積-他-不 同一視
	23	何が起るかわからないのは不安なので、自分の予定していなかったことはしない。	.386	消-自-不 逃避
	14	他人に対して心優しい人のように振る舞いたいから、相手の感情や思いを汲んでつきあう。	.310	消-他-安 同調
	13	親の考え方と自分の考え方が違うと落ち着かないので、親の考え方に合わせた行動をする。	.389	消-他-不 同一視
	第2因子	16	どんな人とも何かつながりをもって生活しているのだから、人と助け合い自分の役割を果たそうとする。	.684
8		自分のいい加減なところを補うために、自分にとってためにならないと思う仕事でも投げ出さない。	.594	消-自-安 補償
25		人が励まし合うことは心温まることなので、何かで困っている人には気持ち良く手を貸す。	.590	積-他-安 連帯
7		人が助け合うことは生きていく上で大切なので、人の信頼には誠心誠意応える。	.554	積-他-安 連帯
39		他人を思いやる気持ちは大切だと思うから、他人のことをいつも考慮に入れて行動する。	.465	消-他-安 連帯
37		心が豊かになるような人のつきあいが大切なので、たまたま行きあわせた人の話でも本気で聞く。	.431	積-他-安 同調
第3因子	10	お互いの理解を深めて楽しくつきあえるように、自分と違う考え方も尊重して聞こうとする。	.359	消-他-安 同調
	4	我慢をしていると落ち着かなくなるので、自分の嫌いなことはやろうとしない。	-.308	消-自-安 逃避
	38	自分の考えをより論理的にするために、自分にとってためになる本を読む。	.654	積-自-安 知性化
	32	視野を広げることで自分を豊かにするために、不得意な分野であっても知識を得るように取り組む。	.592	積-自-安 知性化
	12	より常識的な判断力を身につけるために、今の時代の情報源となる新聞や雑誌を読む。	.567	積-自-安 知性化
第4因子	6	自分の専門的な事柄の理解をより深めたいので、自分にとっては難しい専門書でも調べながら読む。	.447	積-自-安 知性化
	27	自分の行動をより責任ある知的なものにするために、世の中の道徳や社会規範を身につける。	.315	積-自-安 知性化
	1	罪悪感にさいなまれるのはいやなので、自分の過ちを罪としては認めない。	.563	積-自-不 拒絶
	3	大人びた振る舞いをして目上の人と対等に付き合うことで、自分の未熟さを補うよう行動する。	.473	消-自-安 補償
第5因子	36	自分の失敗に悩むのはいやなので、自分の失敗を失敗としては認めない。	.445	積-自-不 拒絶
	20	仲の良い友達と同じようでない不安なので、自分に似合わないと思って友達を着ている流行の服を着る。	.387	積-他-不 同一視
	40	他人との関係は自分にとって役に立つものではないから、他人の意見や考えを非難したり批判しない。	.367	消-他-不 孤立
	9	自分と違う意見を受け入れると不安なので、他人の意見には耳も貸さない。	.591	積-自-不 拒絶
第6因子	29	自分の思い通りにならないのは腹が立つので、どんな意見でもけちをつけて受け入れない。	.531	積-自-不 拒絶
	10	お互いの理解を深めて楽しくつきあえるように、自分と違う考え方も尊重して聞こうとする。	-.503	消-自-安 同調
	33	自分の我がままから人に迷惑をかけたくないので、相手に合わせて控えめに振る舞う。	-.328	消-他-安 同調
第7因子	24	自分の欠点を自分の心掛けで補うために、欠点をださないよう注意をはらって行動する。	-.599	消-自-安 補償
	27	自分の行動をより責任ある知的なものにするために、世の中の道徳や社会規範を身につける。	-.401	積-自-安 知性化
	5	いろいろな人のめぐりあいは楽しいので、学歴や職業にかかわらずどんな人ともつきあう。	.340	積-他-安 連帯
第8因子	20	仲の良い友達と同じようでない不安なので、自分に似合わないと思って友達を着ている流行の服を着る。	-.464	積-他-不 同一視
	13	親の考え方と自分の考え方が違うと落ち着かないので、親の考え方に合わせた行動をする。	-.460	積-他-不 同一視
	4	我慢をしていると落ち着かなくなるので、自分の嫌いなことはやろうとしない。	.406	消-自-不 逃避
第9因子	35	好きな人と同じ趣味でない不安なので、我慢しても相手に合わせようとする。	-.317	積-他-不 同一視
	30	他人は所詮何の手助けにもならないので、他人に自分の相談事をしない。	.650	消-他-不 孤立
	18	人の心の奥底まで理解するのは不可能だから、最初から友達つきあいなどをしない。	.592	消-他-不 孤立
第10因子	2	他人は全く信用できないので、他人に自分の頼み事などはしない。	.582	消-他-不 孤立
	26	自分の考えは人とあわないので、人前では自分の考えは言わない。	.495	消-他-不 孤立

注) 積…積極的 消…消極的 自…自己 他…他者 安…安定感 不…不安感を示す。

一方、「友達と同じようでないからといって不安ではない」「我慢していると落ち着かなくなる」「好きな人と同じ趣味でないからといって不安ではない」ということは、自我機能の水準で言えば観念的であったとしても、知的処理を伴うものと言える。以上より、第7因子を「自己確実感を伴う知性化」の因子と解釈した。第8因子は、自我防衛機制の「孤立」に属する項目によって構成されている因子である。項目内容を見ていくと、他人との関係は、自己を不安定にさせるものであり、信頼の対象ではないという存在様式を抽象することが出来る。他人に対して疑惑の念を持ち、自ら相手との関係を断っている態度であり、相互成長的な対人関係の受け入れは考えられていない。そこで、第8因子は、「他者疑惑を伴う孤立」の因子と解釈した。第9、10因子に属する因子負荷量の高い項目は、他の因子と重複しており、解釈は行わなかった。

Ⅲ-2 現代青年の自己存在様式の様相

因子分析の結果に基づき、自己存在様式に関して8因子を解釈したが、このことから、現代青年の自己存在様式として、少なくとも八つの様相を描くことが出来る。これらの様相を踏まえ、以下に仮設した構造の各次元について現代青年の自己存在様式の特徴について考察してみよう。

まず「感情の状態」の側面として、「安定感」と「不安定感」を配置したが、因子分析の結果、この二つの方向性を示す因子が抽出された。「不安定感」を示す因子は、第1、4、5、6、8因子であり、「安定感」を示す因子は、残りの2、3、7因子である。「不安定感」を反映する因子に関して考察すると、まず第1因子から、自分の行動に対する決定を、自分の中にある規範によってではなく他者に委ね、あたかもそれが自分で決定したかのように振る舞うという現代青年の存在様式が示される。多くの現代青年は、他人からはずれない、他人から認められるということの一つの価値とし、他人の求めるようなパーソナリティになるという「市場的性格」⁴⁶⁾をもつことがうかがえる。これは、「他者」と同一視することで安定感を得る「持つ様式」であると言える。だが、他者に受け入れてもらいたいために同一視するからと言って他者を信頼しているとは限らず、実は他者は信用せず表面だけの付き合いをしており、他者のことは尊重していないという在り方が、第5、第8因子の内容から推量出来る。また、学生という社会的にかなり配慮された立場に甘んじ、時には大人の顔で振る舞い、時には大人ではないとして社会的な責任を回避するという存在様式のあることも示唆された。そこには、第4因子が示す自己不確実感を反映していると見る事が出来る。自己の内なる不確実感を押え込み、またその不確実感を意識化しないが故に、他者に同一視したり、あるいは自己を正当化し他者を拒絶する。他者依存的ではあるが、他者は信用しないという心的特徴が「不安定感」を示す存在様式に表出していると言えよう。

一方、「安定感」を反映する因子に関して考察すれば、第2因子は、第5、6、8因子の表す存在様式の側面を考慮すると、不安定感を抑圧するために、他者と連帯しており、「安定感」というよりは現代青年の「安定志向」性を反映する観念的な因子であると言える。第3、7因子は、共に「知性化」の因子であるが、それぞれの因子に属する項目内容との照合を含め検討すると、第3因子に関しては、他人より向上した自己を渴望している存在様式を示すと言ってよく、また、第7因子においては、知的処理により自分の行動に何らかの合理的な理由を付けているが、現実性にかけて観念的であると受け取れる。このことから、現代青年は「安定感」を持ち得る「ある様式」の方向で生きることを志向するが、それはあくまで観念的な水準にとどまり、現実的にはそう出来得てい

ないことが示唆され、実際には「不安定感」を示すことになる。以上のことから、現代青年の「不安定感」の大きさをうかがい知ることが出来る。また自己存在様式を「感情の状態」という次元で問題にすると、**「安定感」と「不安定感」という二つの方向性を考慮することが必要となる。**

次に、「かかわりの対象」を示す因子として、「他者」に関しては第1, 2, 5, 8因子、「自己」に関しては第3, 4, 6, 7因子が抽出された。「他者」に対するかかわりは、観念的には他者と連帯を志向しているが、現実的には、他者に同一視するという依存的なものと、他者を拒絶、または他者から孤立するという排斥的なものとに分化する。一方、「自己」に対するかかわりは、観念的に自己に関して知的、合理的な説明をつけ処理する方向、自己を不安定にさせる部分を抑圧、または退行とするという方向のように、現実の自己を受容していないかかわりであると言える。この点では、「他者」に対するかかわりも現実の自己の受容を前提としておらず、自分が無力感、不安感にさいなまれないためのかかわりであり、自己中心的、利己的であると言えよう。フロムが「自分自身にのみ興味をもち、すべてのものをも自分自身のためだけにただ欲しいと思い、与えることには喜びを感じず事なく、ただ奪い取ることのみ喜びを感じている」⁴⁷⁾と言った「持つ様式」を反映していると言える。これに対して、「ある様式」は自己中心的ではなく、「他者との関係においては、与え、分かち合い、関心をともにする生きた関係となる」ものであり、以上のことから「かかわりの対象」を「自己」「他者」という二側面にとらえることは妥当であると言える。

最後に「対象への取り組みの態度」に関して言えば、表4に示すように、かかわりにおける「積極的」な態度を示す因子として第2, 3, 5因子が、「消極的」な態度を示す因子としては第7, 8因子が抽出された。「積極的」とは「能動的」であり生産的なことであるが、2, 3, 5因子に抽象される「対象へのかかわりの態度」は、フロムの言う「内面的能動性」の表出であるとは位置付け得ない。第2因子は、観念的な「連帯」の因子であり、安定を志向することのみとどまっている。また、第3因子においては、知的手段を取って目指して行くものは、現在よりも向上した優れた自分であり、その渴望を満たすために行動しているととらえられ得る。更に、第5因子においては、自分の安定を図るために他者の意見や考えを一切拒絶する存在様式が示されたが、それは自己及び他者双方にとって生産的ではない。これは、フロムの指摘する「疎外された能動性」すなわち「受動性」に基づいていると言えよう。一方、「消極的」な態度を示す存在様式に関しては、まず、知的な思考により観念的に自己の行為の説明を試みる存在様式と、自らは他者とかかわらないという存在様式が示された。どちらも根本的及び現実的には問題の克服・解決にならず、生産的ではないと言える。以上より、「対象への取り組みの態度」に関しては現代青年の多くが、「消極的」即ち「受動的」な態度を示していると言え、そこから、「対象への取り組みの態度」を「積極的」「消極的」の二水準にとらえることは妥当であると言えよう。

お わ り に

以上、因子分析の結果からではあるが、現代人の持つ不安定感の大きさ、他者依存的でかつ、自己中心的な在り方及び受動的な態度が明らかとなった。このことは「持つ様式」の特徴であり、フロムが示唆しているように、高度産業社会に生きる現代人は、「ある様式」よりも「持つ様式」を

頻繁に経験せざるを得ないことを示している。抽出された因子からは、現代人の多くが、他者に同一視し、また他者を拒絶し、他者から孤立するというように、他者とのかかわりにおいて「生きた関係」を結ぶことが出来ないだけでなく、自己の問題を押え込み、他者に依存するといった自己存在様式を示すことが明らかとなった。そこから、現代人の生きる世界の広がりには、他者だけでなく自己とも「生きた関係」を結べないほど狭くなっていることが推量される。即ち、Time Perspective の狭量化の中で多くの現代人は生きているということを想像させる。

本稿では、「自己存在様式」に関する因子分析的検討に焦点を当てて論及したが、自己存在様式と Time Perspective との関連を、それぞれを構造する次元間の連関を見ることによって、更に詳細に検討することが必要であると考えている。

最後に、本研究は、高次の1987年度茨城大学教育学部卒業研究⁴⁸⁾で得た自己存在様式に関する資料に関して、中島が因子分析的に検討を行ったものであり、吉田が最終的に草稿を検討している。研究の実施に当たっては、教育臨床心理学研究室ゼミナールに所属する学生諸氏及びその友人の多大な貢献のあったことを付記して、深甚の謝意を表したいと思う。

注

- 1) 吉田昭久・小熊均・小倉美智子「Time Perspective と Personality との関連Ⅵ —— Time Perspective の心的構造」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』39（1990），pp. 57-73.
- 2) S. キルケゴール（斎藤信治訳）『死に至る病』（岩波書店，1939）参照。キルケゴールは、人間の最大の関心事は「自己」とし、「自己」にかかわる関係を「実存」とよんだ。彼の時間論には、キリスト教の影響が強く表出している。
- 3) J. P. サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』1巻（人文書院，1973），pp. 274-414. ここに、サルトルの時間論が述べられている。
- 4) 日高三喜夫・吉田昭久「Time Perspective と Personality との関連Ⅱ —— 現象学的分析」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』30（1981），pp. 79-95. J. P. サルトルの時間論について言及しているので、参照されたい。
- 5) M. ハイデッガー（桑木務訳）『存在と時間』（岩波書店，1973）参照。「日常的時間」から「本来的時間」へ戻ることとして「時間性」をとらえている。
- 6) 同書，中巻，pp. 21-48. 根源的に「被投性」とは、人間が自分の意志に関係無くこの世に誕生してしまうこと、そして「投企」とは、誕生した世界で持っている力を使用しながら生きて行くことである。
- 7) 同書，上巻，p. 104.
- 8) R. メイ（伊東博・伊東順子訳）『存在の発見』（誠信書房，1977），pp. 194-205.
- 9) E. ミンコフスキー（中江育生・清水誠訳）『生きられる時間1』（みすず書房，1972），p. 25.
- 10) E. フロム（佐野哲郎訳）『生きるということ』（紀伊国屋書店，1977），pp. 103-178. ここで「あること」と「持つこと」についての分析がなされている。
- 11) 自己存在様式の様相については、多くの研究者が見解を主張しているが、本論文においては、E. フロムの理論を中心に言及する。
- 12) E. フロム，前掲書，p. 34.
- 13) 同書，p. 113.
- 14) 同書，pp. 117-118.

- 15) 「疎外」とは、みずからの行動の主体として、即ち一個の考え、感じ、愛する人間として、自分自身を体験出来ない状態を言う。
- 16) E. フロム、前掲書、p. 50.
- 17) 同書、p. 267.
- 18) 同書、pp. 126-137.
- 19) E. フロム（懸田克躬訳）『愛するということ』（紀伊国屋書店、1959）参照。この中で、「愛」を受動的、他者依存的なものではなく、能動性、活動性として、また「奪うもの」ではなく「与えるもの」としてとらえている。
- 20) 同書、p. 27.
- 21) E. フロム『生きるということ』、p. 154.
- 22) 同書、p. 175.
- 23) E. フロム（作田啓一・佐野哲郎訳）『希望の革命』（紀伊国屋書店、1970）、p. 31.
- 24) 同書、pp. 23-26.
- 25) E. フロム『生きるということ』、pp. 175-177.
- 26) E. フロム（加藤正明・佐藤隆夫訳）『正気の社会』（社会思想社、1958）、p. 18.
- 27) E. フロム『愛するということ』、p. 154.
- 28) 「利那主義」に関しては、前論文で詳細に述べたので参照されたい。吉田昭久・寺門陸峰・小熊均「Time PerspectiveとPersonalityとの関連Ⅴ—自己—環境認識を指標として」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』35（1986）、pp. 171-196.
- 29) R. メイ（小野泰博訳）『失われし自我をもとめて』（誠信書房、1970）、pp. 282-310.
- 30) E. フロム『愛するということ』、p. 161.
- 31) E. フロム（佐野哲郎訳）『反抗と自由』（紀伊国屋書店、1983）、p. 89.
- 32) E. フロム（阪本健二・志貴春彦訳）『疑惑と行動』（東京創元社、1965）、p. 221.
- 33) E. フロム『反抗と自由』、p. 93.
- 34) E. フロム（日高六郎訳）『自由からの逃走』（東京創元社、1965）、p. 281.
- 35) 同書、p. 302.
- 36) E. フロム『希望の革命』、p. 16.
- 37) E. フロム（谷口隆之介・早坂泰次郎訳）『人間における自由』（東京創元社、1972）、p. 21.
- 38) E. フロム『生きるということ』、p. 142.
- 39) E. フロム（鈴木重吉訳）『悪について』（紀伊国屋書店、1965）、p. 205.
- 40) E. フロム『生きるということ』、pp. 151-154.
- 41) 同書、p. 153.
- 42) 同書、p. 154.
- 43) 同書、pp. 126-127.
- 44) 同書、p. 129.
- 45) 鈴木大拙・E. フロム・R. デマルティエーノ（小堀宗柏・佐藤幸治・豊村左知・阿部正雄訳）『禅と精神分析』（東京創元社、1960）、pp. 158-159.
- 46) E. フロム『生きるということ』、p. 93.
- 47) 同書、p. 21.
- 48) 高次美佳「自己存在様式と価値志向性との関連について」茨城大学教育学部卒業論文、1987、未発表。
- 49) 中島千加子「自己存在様式と時間展望との関連」茨城大学教育学部卒業論文、1989、未発表。

Appendix I - i 質問票

大学生の日常生活事態に対する意識調査

(調査のお願い)

現在当研究室では、「現代人の日常生活における意識の諸問題」という一連の研究を行っています。その一環として、現代人の意識について、4年制大学生を対象とした調査を行うことになりました。つきましては、現代人の意識の諸問題を追求する重要な研究となりますので、ぜひともご協力ください。

なお皆様の回答は、全資料を使ってコンピューターによる統計処理を行いますので、個人の結果が外部にもれるようなことは絶対にありません。

なお調査の結果は、研究以外の目的には使いませんので、自分の思ったとおり、感じたとおりに正直にお答えください。

茨城大学教育学部教育臨床心理学研究室

初めに、次の事項に○印あるいは記号にてお答えください。

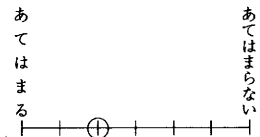
大学名 _____ 大学 _____ 学部 _____ 学科 _____

年齢 a. 18～19歳 b. 20～21歳 c. 22～23歳 d. 24歳以上

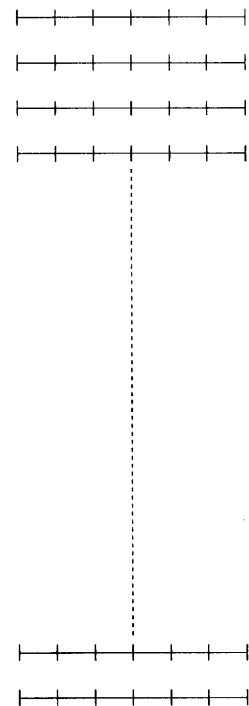
性別 a. 男 b. 女

(設問1) 以下に、私達が日常生活を送る際の、さまざまな行為について述べられています。それぞれの項目を読んで、あなたが普段「している」ことを思い出して、今のあなたに、一番びったりするところに例にならい○印を付けてください。

例) 日頃の自分の行いを、後悔することはない。



1. 罪悪感にさいなまれるのはいやなので、自分の過ちを罪としては認めない。
2. 他人は全く信用できないので、他人に自分の頼み事などはしない。
3. 大人びた振る舞いをして目上の人と対等に付き合うことで、自分の未熟さを補うよう行動する。
4. 我慢をしていると落ち着かなくなるので、自分の嫌いなことはやろうとしない。
5. いろいろな人とめぐりあいは楽しいので、学歴や職業にかかわらずどんな人でもつきあう。
6. 自分の専門的な事柄の理解をより深めたいので、自分にとっては難しい専門書でも調べながら読む。
7. 人が助け合うことは生きていく上で大切なので、人の信頼には誠心誠意応える。
8. 自分のいい加減なところを補うために、自分にとってためにならないと思う仕事でも投げ出さない。
9. 自分と違う意見を受け入れると不安なので、他人の意見には耳も貸さない。
10. お互いの理解を深めて楽しくつきあえるように、自分と違う考え方も尊重して聞こうとする。
11. 自分の知らない話題にはついていきたくないので、みんなと話をしているときでも聞いていない。
12. より常識的な判断力を身につけるために、今の時代の情報源となる新聞や雑誌を読む。
13. 親の考え方と自分の考え方が違うと落ち着かないので、親の考え方に合わせた行動をする。
14. 他人に対して心優しい人のように振る舞いたいから、相手の感情や思いを汲んでつきあう。
15. 仲間内で自分だけ違う態度を取るのには落ち着かないので、物事を決めるような時にはまわりの人に合わせる。
16. どんな人でも何かつながりをもって生活しているのだから、人と助け合い自分の役割を果たそうとする。



Appendix I - ii

17. 失敗するのが怖いので、一度失敗したら二度と挑戦しない。
18. 人の心の奥底まで理解するのは不可能だから、最初から友達つきあいなどをしない。
19. 自分の容姿をより良く見せるために、体型の欠点が目立たないような服を着る。
20. 仲の良い友達と同じようでない不安なので、自分に似合わないと思って友達も着ている流行の服を着る。
21. 自分の常識が足りないところを補うために、知らない話では知っている顔をして聞き役にまわる。
22. 他人に良い印象を与えるように、いつも相手に合わせて行動する。
23. 何が起るのかわからないのは不安なので、自分の予定していなかったことはしない。
24. 自分の欠点を自分の心掛で補うために、欠点を出さないよう注意をはらって行動する。
25. 人が励まし合うことは心温まることなので、何かで困っている人には気持ち良く手を貸す。
26. 自分の考えは人とあわないので、人前では自分の考えは言わない。
27. 自分の行動をより責任ある知的なものにするために、世の中の道徳や社会規範を見につける。
28. 物事の取り組み方が仲の良い友達と違うと不安なので、友達と同じような仕方をする。
29. 自分の思い通りにならないのは腹が立つので、どんな意見でもけちをつけて受け入れない。
30. 他人は所詮何の手助けにもならないので、他人に自分の相談事をしない。
31. 間違いをおかすのが不安なので、自分からは何も取りかかろうとしない。
32. 視野を広げることで自分を豊かにするために、不得意な分野であっても知識を得るように取り組む。
33. 自分の我がままから人に迷惑をかけたくないので、相手に合わせて控えめに振る舞う。
34. 自尊心が傷つくのは辛いので、できないと思ったら途中で終わりにする。
35. 好きな人と同じ趣味でない不安なので、我慢しても相手に合わせようとする。
36. 自分の失敗に悩むのはいやなので、自分の失敗を失敗としては認めない。
37. 心が豊かになるような人のつきあいが大切なので、たまたま行きあわせた人の話でも本気で聞く。
38. 自分の考えをより論理的にするために、自分にとってためになる本を読む。
39. 他人を思いやる気持ちは大切だと思うから、他人のことをいつも考慮にいれて行動する。
40. 他人との関係は自分にとって役に立つものではないから、他人の意見や考えを非難したり批判しない。

あてはまる

あてはまらない

(設問2) 省略

以上で質問は終わりです。
 多くの項目にご協力していただきまして、ありがとうございました。
 皆様の資料は、研究のための貴重な資料として、十分に活用させていただきます。

Appendix II パリマックス回転後の因子行列

Item	Factor	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		0.156	-0.081	-0.050	0.563	0.245	0.150	0.060	0.144	0.005	0.042
2		-0.074	-0.078	0.103	0.094	0.094	0.094	0.004	0.582	0.058	0.087
3		0.096	-0.011	0.071	0.473	0.060	-0.079	-0.038	0.044	-0.048	-0.045
4		0.089	-0.308	-0.108	0.294	0.206	-0.099	0.406	-0.155	0.063	-0.112
5		-0.108	0.322	0.050	-0.003	-0.075	0.340	0.039	-0.123	0.089	-0.163
6		-0.160	0.170	0.447	0.011	0.023	-0.106	-0.230	0.107	-0.033	-0.128
7		-0.026	0.554	0.052	-0.148	0.044	-0.108	-0.023	-0.163	-0.109	0.144
8		-0.113	0.594	0.098	-0.095	-0.174	-0.069	-0.252	-0.101	0.040	-0.044
9		0.121	-0.146	-0.032	0.194	0.591	0.082	-0.031	-0.080	-0.080	-0.117
10		0.007	0.359	0.097	-0.120	-0.503	0.094	0.290	-0.146	0.019	-0.118
11		0.208	-0.051	-0.205	0.277	0.236	-0.115	-0.251	0.254	0.068	-0.068
12		0.121	0.066	0.567	0.017	0.056	-0.011	0.171	-0.012	-0.087	0.166
13		0.389	0.151	0.098	0.093	0.182	0.051	-0.460	0.064	-0.155	-0.002
14		0.310	0.187	0.209	-0.021	-0.272	-0.138	0.071	0.016	-0.309	0.165
15		0.606	0.074	0.068	0.191	-0.111	-0.157	-0.106	-0.067	-0.140	-0.267
16		-0.015	0.648	0.207	0.032	-0.121	-0.002	0.108	-0.193	0.026	0.012
17		0.578	-0.090	-0.097	-0.084	0.213	0.026	0.045	0.051	0.041	0.232
18		0.195	-0.144	0.061	0.125	0.109	-0.029	-0.152	0.592	0.085	0.043
19		0.060	0.077	0.028	0.078	0.079	-0.111	-0.089	-0.086	-0.466	-0.005
20		0.168	-0.074	-0.042	0.387	0.037	-0.050	-0.464	0.154	-0.108	0.053
21		0.501	-0.039	-0.104	0.130	0.067	-0.199	0.117	0.056	0.072	0.029
22		0.737	0.157	0.045	0.181	-0.119	-0.047	-0.116	0.034	-0.144	0.104
23		0.386	-0.062	-0.079	0.119	0.001	-0.127	-0.034	0.217	-0.052	0.109
24		0.198	0.217	0.036	0.030	-0.037	-0.599	-0.028	0.074	-0.113	-0.026
25		0.029	0.590	0.191	-0.051	-0.035	-0.282	-0.014	-0.268	-0.152	0.059
26		0.305	-0.096	0.044	0.075	0.098	-0.078	-0.078	0.495	-0.049	0.047
27		0.048	0.204	0.315	0.032	-0.237	-0.401	0.036	-0.191	-0.020	0.051
28		0.625	0.023	-0.027	0.283	-0.036	-0.012	-0.176	-0.058	-0.047	-0.120
29		0.091	-0.166	0.050	0.182	0.531	0.016	0.091	0.231	-0.024	0.103
30		0.075	-0.220	0.056	0.090	0.142	0.086	0.084	0.650	0.062	-0.044
31		0.539	-0.061	-0.066	0.150	0.089	-0.131	-0.084	0.331	0.271	0.067
32		-0.153	0.294	0.592	-0.024	-0.052	-0.004	-0.085	-0.010	-0.115	-0.098
33		0.403	0.104	-0.014	0.000	-0.328	-0.307	-0.013	0.195	-0.112	-0.088
34		0.641	-0.106	-0.052	0.025	0.193	0.085	0.051	0.224	-0.044	0.052
35		0.389	-0.041	0.064	0.158	-0.013	-0.112	-0.317	0.126	-0.075	0.089
36		0.261	-0.088	-0.033	0.445	0.147	0.028	-0.117	0.070	0.078	0.229
37		0.122	0.431	0.266	-0.022	-0.114	0.170	0.006	0.017	-0.004	-0.092
38		-0.035	0.087	0.654	-0.018	0.052	-0.004	-0.046	0.161	-0.028	-0.033
39		0.092	0.465	0.025	0.019	-0.222	-0.160	-0.009	0.017	-0.143	-0.141
40		0.164	-0.066	-0.090	0.367	-0.086	-0.110	-0.104	0.342	-0.201	-0.113